よーく、そのときにわかりました。だから、僕は、相手に注入していくというふうなことは、教育のひとつの要素ではあるけれども、違うなあ、という感じがあります。

忘れられないこと　―ある少年の死―

僕は寿町で生活館の職員という仕事は今年四月いっぱいで終りになってしまって、児童相談所に来たわけですが、寿町でどうしても忘れられないもので、ひとつ挙げろと言われれば、このことなんです。

寿町のすぐ裏に、中村川という川があります。その川は、昔はしけが通った運河ですが今は朽ち果てたはしけがいっぱい並んでいます。そこに、あるとき、もう四年ぐらい前ですが、子どもが自転車で遊んでまして落ちたんです。一緒に遊んでた子が「大変だー、友だちの何々ちゃんがおっこったよー」ということで大騒ぎしまして、おとなたちが周りにかけつけましたけど、子どもも自転車も上がりませんでした。親も飛んで来ました。それからすぐ、水上警察が呼ばれる。船が来る。おまわりさんが周りに縄を張る。そして、遺体を探すわけですね。たくさんの労働者がまわりでもって見守りました。どういうふうに

探したかというと船ですね。非常に原始的なやり方なんですね。竹竿ですね。竹の長いのを先をパッと切りましてね、それを何人もの人が下へさすんです。そして何か異物に当たると「おっ、ここだ」というと、岸のところに大きなクレーン車みたいなのが来てましてガーッと落ちて、パシャーッと中に。怪獣の爪みたいにしてグーッと引き上げる。そうすると昔の鉄板のクズだとか、木の切れ端だとかそういうものがいっぱい。「あっ、無い、無い」ザッザ、ザッ。「こっちだ、こっちだ、こっちに何かあったぞ」ジャボーッ。

これをみんなどんな想いで見てましたか。どにかく半日ぐらいの間、ずーっと、かたずをのんで見ていました。でも、見つからないんです。川はもう、ほじくり返されてドロンドロンになりましてね。そして、ザバッ、ザバッと刺してる感じですね。

夕方、仕事から帰ってきたSさんが、沖縄の方ですけど「おっ、何だ、まだ見つかんねえのか。俺ちょっと探してやるわ」部屋に上がって、泳ぎが得意な人ですね。海水パンツひとつになって、水中めがね持って来たんです。「だめだ、だめ。こんなとこ入んの、おまえだめだ」というのをかいくぐりましてね。ダーッと飛び込んで、そして、五往復ぐらいしました。時間にすればほんのわずかです。

半日の時間をかけて、あの中をメチャ、クチャにかきずり回して、あの鋭った竹ヤリでおそらくその子の上にも刺さるかもしれないという想いで見ていた人たちの中で、何度も何度もつき刺されながら、おそらく両親の人たちはまるで自分が刺されるようにして半日待ったと思うんです。見つからなかった遺体があっという間に見つかりました。そこからわずか十メートルぐらい下流です。ちょっと流されただけです。

Sさんは、その子の遺体をひき上げましてね、岸のところまで行って、もういっぱいの泥で、鼻も目も耳もみんな泥だらけでした。僕もその場で見ていましたけど、うわずみのきれいな水できれいに顔を洗ってね。泥を出して、耳も洗って、頭をなでつけて、それから本当に自分の子みたいにして抱いてね。上って、両親に渡しました。見てた労働者がもうみんな、声をあげて泣きました。

寿の町は単身の労働者が中心ですから、どんな想いでSさんがこの町に流れついたか、沖縄から来たかわかりません。家族がいたかもしれない。子どもがいたかもしれない。いろんな事情で、家族だとか、地域からみんな切り離された人が多いんですね。その人が一番熱烈に子どものことを考えていたんじゃないか。寿のようなところで暮している人たち

が本当に人間を人間として扱ってるんじゃないだろうか。

たしかに、僕らはいろんなことを、いろんな人たちに任せるようになりました。自分の子どもを教育するのも、学校に任せればいい、というふうになりました。病気になれば、病院に連れて行けば治ると思いました。何かあれば、どこかに相談に行けばいいというふうになりました。そして、子どもが川に落ちたら、なぜ自分や自分の仲間たちで探さないで、警察の人が来て、水上警察の人たちがあの竹ヤリで、みんなイヤだと思っているのに探して、それをじっと、縄を張った外側で見てたんですか。

そういうふうに、僕らは僕らの一番大事は子どもたちや、自分の一番大事な人たちを他のところに任せて「やってくれない、やってくれない」というふうに、言うようになってしまったんじゃないでしょうか。そのSさんが上げてきて、何にも名前も言わずに、僕はそのSさんを知っていましたからあとで話ができましたけれども、何にも言わないで「じゃあな」と、彼はとんでいきました。

いま、僕がもし寿で最大に学んだことは何かというと、たくさんありますけど、このことなんです。自分がもっとも大事にしているものをそこを売り渡さないで、自分たちがもう

一度自分たちの手に取り戻すということが、今一番大事なことかもしれない。どこかに任せてしまうのではなくて、自分たちがもう一度、自分たちの子どもたち、自分たちの育ててくれた両親のこと、自分たちの地域のこと、それをもう一度、自分たちの手に取り戻すということが、一番忘れられていることじゃないかと思います。

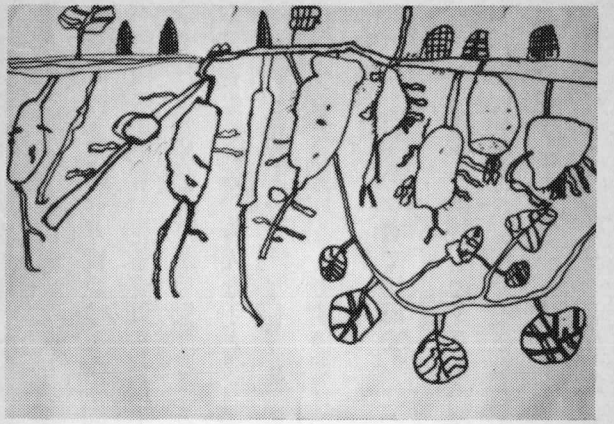
児童相談所へきて

そして僕は、そのつづきのなかで、児童相談所に来ました。今日ここに来るまで全国の児童相談所の職員の人たちの自主的な研究会があるんですが、名古屋でやっていまして、そこにいってました。あしたまでなんですが、全国各地で今、子どもたちの問題は実にすさまじいまでに、もうメチャ、クチャにされています。児童相談所というのに僕は入って寿の町でも、あるいは自分の周辺でも、ある程度見ていましたけど、児童相談所の職員になって、もう次から次へと、子どもたちの問題が上がってくる。どうしていいかわからないくらい問題が上ってきて、児童相談所の人たちも、もう手が打てない。職員を増やしてくれということじゃ、どうにも問題の解決にならない。

人数を増やせば増やすほど問題はいっぱい起ってくるだけで、何の解決にもならない。もう考え方を根本的に変えなくちゃならない。どう変るか。地域というものが本来子どもを育てるべきだという視点にもう一回帰って、地域の人たちと一緒に、児童相談所の職員も、学校の先生も、児童委員も、民生委員も、何もかもみんなそのなかで、もう一度生き返すことができないのか。生きることができないのか、というテーマになったんです。もうどうしていいか、みんな手さぐりの状況です。ちょっとまあ、息をぬいて考えなくちゃいけないと思うんですけども、もうご存知の方が多いと思いますけども、専門の方もいらっしゃるので、あれなんですけど。

日本の子育ての歴史

つまり、今までの日本の子育ての歴史というものですね。この地区でも、きっとお年寄りの方たちが詳しく知ってると思うんです。しかも、人類が続いてきてながーい間、これ子育て、子産みはずーっと続いてきているわけです。だから、だれでも出来たわけです。それが、何でこの何年かですね、出来なくなるなんてことはありえないわけです。



それは、今までの子育ての伝統、それをしっかりと受け止めることができなかったから、いまこうなっているんだというふうに、僕は考えてみたいと思っています。

そうすると、細かいことはたくさんありますが、大ざっぱに言いますと、年齢ですね。七歳、十四歳、十七歳というのが、大きな節目になってたということに気がつきます。まず、七・五・三というのをどこでもやってきていますが、五と三はそれぞれ大事ですがちょっとおいといて、七歳までというのは、今までは人間のうちに入ってない、神様だ。まだ神様のうちに入ってる。ということで、七歳以後というのが、人間になっていくといいますかね。つまり、人間になっていくというのは、集団生活の中で生きていくということですね。子どもたちの集団ですね。ですから、七歳から十四歳までというのが、ひとつの枠になります。十四歳というのは、昔はこれ成人式なんです。今二十歳になっていますが、十四歳、十五歳ていうのが成人式です。このときには、実にいろんな儀式があって、訓練があって、一丁前になれるかどうかという厳しい作業がありますが、十四歳から十七歳、今の中学二年生から高校二年生までというのが、ひとつの大きな枠になります。それから、十七歳以上というふうに、児童相談所の分け方というと、十八歳以下の子どもたちを対象にするわけですが、大ざっぱにいうとそういう問題です。それを、どこで、どういうふうにしてみたらいいかなあということで悩んでいたんですが、ひとつの見方です。これがすべてと思いませんけど。

ひとつは、友だちがどういうふうにしてできていくかという、友だちの作られ方、あるいは友だちとどういうふうになっていけるかという、そういう区分けで見ると、非常にはっきり見えます。

七歳から十四歳までというのは、中学一年生までというのは、本当に子どもです。いろんな問題起こす子どももたくさんいますけど、まず子どもなんです。本当に子ども、子ど

もした子どもなんです。だから、それはもう、ゴチャゴチャした集団のなかで、とにかく生きているんで、集団のなかに自分が入れるか、入れないかということが、もうとても関心事です、子どもにとって。きのうまで仲良かった友だちから、つまはじきされることもあるし、からだの小さかった子は、なかなか中に入れない。このときには本当に、弱肉強食といいますか、強い子が弱い子をいじめたりとか、いろんな問題がここに入ってますから、このなかでみんな悪戦苦闘するんです。それで、このなかで悩んだり、苦しんだりするわけですね。

僕も、今の子どもたちとつき合ってて想い出したのは、僕が小学校の生徒だったときに小さな分教場から本校に行ったときに、本校の仲間からウーンといじめられましてね、分校から来たっていうので。そして、学校に行きたくなくて、ずい分家も手こずらせて、そして僕が思った方法は、六年生の卒業式に仇討ちをするという、その中心のボスの男の子がPTAの会長の子どもさんだったんですが、その子に何としても仇討ちしたいと思って、あの当時は、もっといろいろあったかもしれないけど、剣術の本読んで、家の柿の木のところに棒を吊して、これで勝つわけないんですけども、毎日帰ってきて一生懸命練習して、

決闘状で申し込んで、卒業式が終って、先生もだれも知らなかったです。クラスの子しか知らなかったんですが、卒業式が終って、その子と決闘をしました。今でいえばタイマンですね。全然彼の方が大きいし、僕は小さかったですから、もうメチャクチャにやられて、口の中にいっぱい砂を詰め込まれて、ボカボカやられたんですけど、もうひとり、いつもいじめられてた子がいたんですが、僕がやられてるときに、その子にむしゃぶりついていって、その子も何人かの子どもたちにメチャクチャにやられました。卒業式が終ってて、もう先生も帰ってて、夕方ですね。服もビリビリになって、涙と鼻水といっしょくたになって、その子と別々の中学へいっちゃったんですけど『今日のこと絶対忘れないでいこうな』なんてことなったんです。こんなことは、そんな当時もういっぱいあって、それぞれその経過してきたことを覚えてるかどうかわかりませんが、みんなそういう葛藤を経て次の段階にいくわけです。これが十四歳までです。

十四歳からはですね、多数のなかに入れるか入れないかという問題じゃなくて、特定の友人関係ができるかできないか。同性ですね。そういう問題になってきて、とっても自分のからだ、肉体に対して不安をもつ時期です。どうにかしなければならない。この時期は

普通に考えても、美意識が全然変ってきますから、普通の人から見たら、どうしてこういうのがいいのかとか、どうしてこんなかっこうがいいのかというふうなものが、とってもいいように見えたりします。それは当然のことで、仲間同士の間でなければ通じない。自分が本当に信頼できる友だち、そこでいろんなおしゃべりをしたり、けんかをしたり、友人に裏切られたり、そういうことのなかで成長していくという、そういうゴタゴタした、しかし集団ではないんです。どちらかといえば、本当に心を許した友人と、つながり合えるかどうかというのが、この時期です。そして、十七歳以後になると、もう少し、自分らしさということに気がついてきて、異性との関係が始まるんです。大ざっぱな言い方で申し訳ないんですけど。

今、こういう分け方で見ると、このどこかで、今の子どもたちはみんな脱落してきます。その問題だ、というふうに僕は思えるんです。つまり、集団のなかであんまり葛籐しなくても育てられるように、親の方や学校の方は配慮しすぎてしまうかもしれない。だから、そのなかでもって、いろんな苦労をしないで、まるで成層圏を飛ぶようにですね、子どもの集団のなかで『全然いい子だ、いい子だ』とってもいい子。ピチッとして、何も問題は

ない。中学生まできちゃった。というふうな感じでそのときどきの子どもの集団のなかで錬えられていく。友人との裏切り、けんか、そのなかで錬えられていく。そして異性の問題で錬えられていくということがなくて、いきなりそこからパーッといってしまう。あるいは、いきなり異性とつながってしまう。中間の同性の友人関係もなく、いきなり女の人と出会ってしまう、男の人と出会ってしまう。というふうな形が多いんじゃないかと思うんです。

この問題を解くため、ちょっと僕がいま扱っている子どもたちの問題を言ってみたいと思うんですが、どんな時期でも、同年輩の子どもたち同士の人間関係というのは、何にも替えられない栄養源です。これはもう、痛いほどわかります。僕なんか一生懸命つき合ってですね、子どもたちと夜遅くもたまり場に行って、いろいろ会って、暴走族といっしょにつながっていくということがあっても、話のわかるおじさんやおばさんということであって、本当の意味で自分が心を割って話せるというのは、やっぱり同年輩の仲間たちです。一年上でも一年下でも通じないものってあります。その仲間から切れてしまうということが、今の子どもたちの大きな空洞、絶望感なんだと思います。あまり僕、入ってから間が

ないので、子どもたちの実態を上げることを憚れることが多いんです。まだ継続中というか続いていましてね、どうなるかわからないんですが。

A君の場合

たとえばA君とします。中学三年生。お父さんと二人です。お父さんはタクシーの運転手。学校から電話がありました。児童相談所にですね。この子はしようがない、悪くてしようがない　髪の毛は染める、剃りは入れる、まゆ毛は剃ってくる、アロハは着てくる、学校にゲタで来る、サングラスをはめてくる、授業はもう大声をあげたり、タバコをふかしたりする、家に帰ってシンナーを吸う、オートバイに乗って遊び回る。何とかしてもらいたい、できれば施設に入れてもらいたい。まず、こういう相談がほとんどなんですが、そういう形できます。

そうするとですね。まず、この子に会うのが大変な難事業なんですが、僕の場合は手紙で、できるだけ僕のことを書きます。自分自身の自己紹介を何度も何度もして、もし会ってよかったら、そっちから会う場所を指定してくれ。なかなか指定してくれません。家に

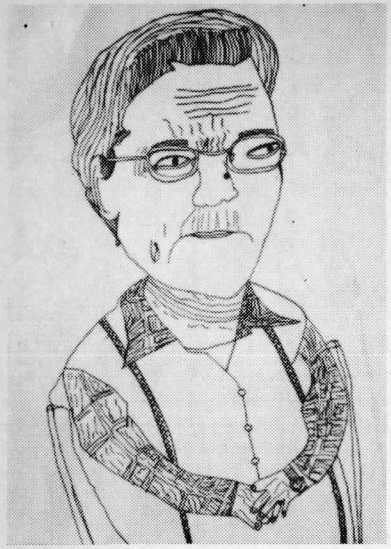
何回も訪ねて行きます。いても、裏側から逃げちゃったりします。学校の先生が訪ねてもそうなっちゃうんですね。学校も警察も児童相談所も、みんな同じ仲間で自分を何とかしようとしている。頭の毛を切ろうとしている。学校へ引きずっていこうとしている。どっか施設へ入れようとしている。警察と同じだ。そういうことしかありませんからね。行った度に、そこでメモを書いて「残念だった、今日は会えなかった、また来るな。元気でいろよ」というふうなメモを置いて帰ってくる。待つんです。とっても長い間、自分では待ちますけど、先にも言いましたけど、僕が寿で学んだことは、自分の側から押しつけたり教えることは絶対に出来ない。そして、今の子どもたちには絶対自分の方から何かしたい。何かしよう、何か言いたい。訴えたいという問題が絶対あるというふうに確信しています。だから、あれば何かあったら必ず来てくれる。来てくれなかったら僕の方は何もできない。というふうに思っています。そうすると、まず今までのところ、ほとんど当たりはずれがなくて、電話がかかってきます。

「あのー、おやじの方じゃなくて息子だけど、おまえ、話聞いてくれる?」電話なんです。

「ああ、よくかかってきたなあ」それで、こうだ、ああだというと、

「知ってるよ、手紙に書いてあったじゃねえか。家来るか、家じゃかっこう悪いから、ちょっとどっか喫茶店かどっか。おまえコーヒーおごってくれるか」ってなことで会います。そうするとね、そうすると、とってもいい青年です。少年です。僕ほとんどこれ違ったことがありません。

そういう意味で、僕自身が体験が足りないのかっていうふうに思ったりするんですけどもう大変な悪だといわれている少年や子どもたちに会いますけど、僕はどの子もみんないい子だというふうに思っています。そしてもっともな話ばっかり聞くんですよ。学校へ行くでしょう。「全然学校わかんないよ、俺。座ってたって、何先生言ってんだかわかんないよ。英語？全然わかんない。数学？　全然わかんない。机座ってりゃあいいって言ったって



一日座ってられるかよ。バカくせえなあ」って言うでしょう。「何にもやることねえんだよなあ、家帰ってきたって何にもやることない。学校行かないで家にいるだろう。そうすると周りみんな学校行ってたら何かガミガミ言うからうるさいから家にいるだろう。テレビ見るか、ラジオ聞くか、レコード聞くか、友だちと電話するか、それしかねえよ。」本当に何かしたいのにやるものが無いのです。そして、髪の毛もし刈ったとしますよ。あの茶色くなった髪の毛を刈ったとしますよ。何があるんですか。もう何にも無くなっちゃうじゃないですか。自分らしいものを主張するものが、何にも無くなっちゃうんです。

それで仲間とつながるというのは、唯一、自分と同じような仲間とつながっています。自分と同じような仲間とつながっていて、その仲間とは、言ってみれば相互扶助をしているわけですね。もう必死になって、自分たちを支える集団を作っているというふうに、考えた方がいいと思うんです。

そして、彼がそういうふうにツッパルようになったときの一番の動機はですね、自分の中学のときの、自分がワァワァ騒いでいるときに「おまえ、廊下に出てろ」といって廊下に立たされた。そのとき先輩が「なんだおまえ、こんなとこにいて」「俺、うるせえから

立たされちゃったよ」「ふざけんじゃねえよ。学校はおまえら教えるところだもんな。そんなこと（ごめんなさいね。だんだん口調が移っちゃって）俺、かけ合ってやるよ。おまえ、ちゃんと中に入って教えてもらえ。学校は教えてもらうとこじゃねえか。おまえ立たされて、そんな、月謝払ってんだろう。俺、かけ合ってやるから来い、来い」っていって「何だよ、おまえ廊下に立たせて何だよ、俺ならいいけどよ、こんなガキ立たすことないだろ」っと、先生とやるわけです。それでもうすっかり、先輩ってカッコウいいなあ。本当に俺のことわかってくれるかもしんないっていう想いでね。ああいう先輩に俺もなりたい。カッコウから何から全部変えていくわけですね。

大人になるということ

ちょっと時間がないのではしょりますけど、いくつかの例は除きますけど、これですね。そっくりそのまま、日本の昔の成人式のしきたりですね、そっくり当てはまっていくんです。

なぜかといいますと、昔は子ども組といって、子どもたちだけで自主組織がありました。これ、もっとウーンと研究しなけりゃいけないと思いますけど。それから若者宿（わかものやど）というのがありまして、若者たちだけが集まっていろんな訓練をしていく。そして一丁前になったということで、おとなの仲間入りをしていくわけですね。今の場合だと、若衆宿の年齢ですが、若衆宿、若者宿、にせこ宿というもののなかで一番大事にされた、つまり子どもからおとなになるために一番大事なものは何かというふうに上げるとですね、いろんなものがあるんですけど、三つに絞（しぼ）り込むことができるといわれています。

ひとつは、あっ、さっきの話でちょっと抜かしたのは「俺、学校なんかどうでもいいから、仕事したいよ」と言ったんです。「もう仕事バリバリやりてえなあ。こんな学校でもってノロノロしてるんだったら、俺はもう仕事早くやりたいよォ。金も取れるし、俺だって余っちゃってるよ、力。何だっていいや、仕事してえよ。だけど中学卒業するまでは仕事しちゃいけないって、学校で言うんだ」こういうことですね。ごめんなさい、抜かしました。

まず第一は、仕事が一丁前になるということです。労働が一丁前に出来るということです。だから、若衆宿のなかで先輩から徹底的にしごかれるわけです。ある程度家（うち）が作ることができる。家のまた家具が壊（こわ）れたから修理することができる、あるいは畑作業ができる。